

(^_^)v 趣味に生きる (第21回) ~. ~. ~. ~. ~. ~.

大 工

小 出 典 男

(元 岡山大学大学院医歯薬総合研究科 総合内科教授, 香川県病院事業管理者)

◆はじめに

前回、漁師・百姓・大工・庭師のタイトルで執筆を開始したが、結局漁師のみで終わってしまった。締め切り日に原稿を送ったところ、2~3日で編集室のTさんから電話があった。「先生、漁師の話は大変面白かった。しかし、写真は釣り道具ばかりで、釣れた魚の写真はないのですか」という。そんなものがあるはずもない。「釣行は荷物が多し。カメラは潮には弱い。カメラなど持って釣りに行くのは素人だ。」と言うと一応は納得してくれるが、なにか不満が残る返事だ。仕方なく、未整理の写真箱をひっくり返してやっと1枚見つけた釣果の写真を送った。電話の要件は釣果の写真だけではなかった。原稿を少し手直したと言うのである。本来のタイトルだった「漁師・百姓・大工・庭師」を「漁師」に替えたと言うのだ。さらに、最後のパラグラフも私が書いていない文章があるではないか。「書き終わってほっとしたところ編集室より、“魚料理・百姓・大工・庭師”についてご披露願いたいと電話があった。さて、さて」と締めくくってある。要するに、「趣味に生きる その2, その3」を書けと言うことらしい。而して、次は「大工」のタイトルで書き始めた。とても魚料理・百姓・庭師には今回も手が届かなかった。

今回はこれでお許しいただき、時間があればまた百姓や庭師を執筆するかも知れない。

◆大工になるきっかけ

父が元気だった頃には、父が毎週田舎に帰り縁側を開けて風を入れ、庭先の畑を作っていた。さすがに父も90歳に近づくにつれ、田舎に行く頻度が減った。田舎の家とは、私の家からは車で30~40分程度の場所で、南面と北面にそれぞれ150m程度の山尾根が連なり、間にあるわずかばかりの平地には、中央を流れる小川に沿って水田が両側に数枚ずつ存在するいわゆる里山である(写真1)。ここにある屋敷は祖父がこの村の村長をしていた頃に建てたもので、父の生家であり、私の生家でもある。築後約100年のボロ家(写真2)・水田・畑・山が少々ある。水田は農協に頼んで近所の方に維持してもらっており、毎年秋には新米が120kgほど届けられている。



写真1 わがふるさと

中央に小川が流れその両側に水田が数枚ずつ存在する、岡山市内から車で30分ほどの地にある里山。



写真2 改修した生家

かつては母屋の右に2階建ての長屋と離れ屋があり、左に高さ15mほどのヒマラヤ杉の大木があった。

父が行けなくなって数年、生家は床が抜け、敷地内の立木も生い茂り、畑は足が踏み入れられないほど草が茂り、ヘビやカエルの天国となっていた。もちろん裏山も原始林と化していた。屋敷と畑はこのまま放置して、自然に家が倒れるまで放置しようと一度は決意していた。父が行けなくなって翌年、何がきっかけでもなく、畑を作ってみたくなった。時間を見つけては草を刈り、納屋に放置してあったクワで耕して、最初は小さな家庭菜園を始めた。これが面白くなって次第に畑は広がり、現在は50坪ほどの立派な畑を再生している。農作業の話は次回に先延ばしして、朽ちかけた屋敷について、話を始めよう。畑を再生する過程で、最初に問題となったのはトイレだ。朽ちた屋敷のトイレは使えず、休憩する場所もない。「そうだ、まずトイレと休憩する場所だけでも、屋敷を改修しよう」そう考えた私は、いくつかの工務店に見積もってもらった。いずれも1千万とかそれ以上の高い値段を吹っかけてくる。

ある時小出グループの新年会で、家の改修をした弟子がこんなことを言った。「台所の窓を2mほど南にずらしてほしい」と工務店に頼んだところ、そんなことはできないと一蹴された。調べているうちにある棟梁を紹介され、この棟梁は窓を見るなり「2m南に動かすんだね。いいよ、明日からやろう。」と言って3日で窓を

移動したというのである。ピンときた私は、弟子にその棟梁を紹介するように頼んだ。その場で棟梁と電話につながり、こともなげに「それでは来週の日曜日に現場を見に行きましょう」との返事だった。

次の日曜日、田舎の屋敷をぐるりと回った棟梁が、ぼつりと言った。「何をどうしたいの?」。「トイレを使えるようにして、床を板張りにして、2階建ての納屋とそれに続く離れ家を潰して、小さい物置小屋を作りたい」、これが私の希望だった。棟梁の回答はさらに簡単で明確だった。「母屋は少し手をいれればもう20年は持つ。梁や柱は良い材料でまだまだしっかりしている。床が少し傾いているが何とかなる。納屋や離れ家を解体するのはワケもない。これでよければやってあげよう。」「あの～、おいくらぐらいかかるんでしょうか?」おそろおそろ聞く私に「私の日当は1日2万円、材料はできる限り倒す離れ家や納屋の古材を使うが、時々新しい材料も必要となるだろう。新しい材料を使うときにも、1日に2万円以上の材料は要らない。」「それに先生も土日で手伝うことが条件だ」「はい。じゃお願いします」事前打ち合わせはこれで終わりだ。自信に満ちた言葉、話の明確さに、私は既にこの時点で魅せられていた。この棟梁が何者かも知らず。腕前も知らず。見積もりもなし。なんとも奇妙な契約である。

◆解体工事

翌週の日曜日の午前7時に現場へ行ってみた。なんと、開始から1週間で納屋の土壁がすでに崩され、竹で編んだ壁の中身が露出しているではないか。さらに納屋の屋根に棟梁が登り、滑り台を使って屋根瓦を1枚ずつ、下へすべり降ろしているのではないか。「何時から来たの～」と聞くと、「ずっと午前4時には来て仕事をしているよ。壁土を槌で崩すとほこりが出るので、近所迷惑になるから近所が寝ているうちにやるんじゃ」という。「それより先生は下へおろした瓦を1ヵ所に並べてくれ」という。昼食まで一緒に瓦降ろしをした。昼からは土壁の内部で露出している、編み竹を外してゆく。1枚外すごとに、「先生は向こうの畑で編み竹を燃やした」という。約束した以上、私も一緒に手伝うしかない。週末に現場へ行くごとに私がやるべき仕事がちゃんと用意してある。私は当分廃材の処分係りだった。いつも昼食は並んで一緒に食べる。棟梁の昼飯はいつも、おにぎり2個とお茶だけだった。最初はコンビニの弁当だった私も、いつのまにか、おにぎり2個とお茶だけの昼食になっていた。おにぎりを食べながら、いろんなことを教えてくれた。棟梁はもともと岡山生まれの宮大工だったこと。大勢の弟子を育てたこと。10年前までは東京で故 田中角栄の目白邸の修理を請け負っていたこと。妻の発がんがんに端を発して、東京での工務店を閉じて岡山に帰ってきて、自分の気に入った仕事だけを引き受ける請負大工をしていることなどを教えてくれた。

しばらくして、離れ家も納屋も剥き出し柱と梁だけになっていた。棟梁は梁の上に上がり、梁の中央から少し離れた場所を平帯(ロープではすべるので危険なのだそう)で縛り、その平帯を滑車につなぐ。次いで梁の両端にインパクトドライバーで穴をいくつかあけることにより、のこぎり作業量を減らしておいてから、チェーンソーで梁の両端を切り離す。すると平帯と滑車に繋がれた長さ5mの太い梁(重さ数十キロ)が、少し斜めになってぶらりと宙に浮く。

梁の先端を軽く押して反対側の着地方向を決めると、声がかかる。「ゆっくり滑車を下すから、梁の先端を捕まえて安全な位置に着地させてくれ」滑車を引くとゆっくりと大きな梁が下りてくる。数十キロの大きな梁が地面に横たわった。見事な作業である。こんな作業を繰り返すと、いつのまにか納屋の2階がなくなっていた。日曜日に私が一緒に作業をする以外は、毎日朝4時から午後3時まで働き、すべて一人で家を解体してしまった。驚きである。棟梁は言う。「一人で家を建てられる人には、一人で家が解体できるんじゃ」「普通の工務店は口だけ出す現場監督と、一人ではなにもできない若い奴らが重機をもってきて、無茶苦茶な解体をする。あれは大工じゃない。重機で壊した古材は再利用はできない。」「それにしても先生はよく働いた。古資材の処理だけで200万円ぐらいはかかるだろうから、その分儲けだね。」とほめてくれる。昼食時間はいつもこんな会話である。次第に私が棟梁の弟子になりつつあることを感じる。

◆母屋の改修と大工修行

離れ家と納屋を解体し、次は母屋の改修だ。天井のシミをみて、天井裏には以前イタチとネズミの両方が居たことを指摘する。イタチは必ずカップルで住みつき、天井のシミはきれいな好きなイタチのトイレの場所だったことを教えてくれる。雨漏りのことも考えて、天井裏に防水シートを張る。シートの端を抑えていると、大工用の大型ホッチキスを使ってすごいスピードで、バシッバシッと針を発射してシートを留めてゆく。古い床はすべて取っ払い、床板を固定する新しい床下梁を作り、その上に地面方向の片面が防水処理してあるコンパネを敷き詰め、さらにその上に新しいフローリング材を固定してゆく。家の4隅の大きな柱の下は、少し腐っているから取り替えるという。腐れの理由は柱の裏にあるトイレの水分とそれに集まる子虫、この子虫をついばむコウモリの存在を指摘する。車のジャッキで柱を支え、柱の腐り部分を切り

取ってから新しい柱を継ぎ足す。なんと、少し傾いていた床にボールをおいても、転がらなくなった。床でシコを踏んでもびくともしない。しっかりした床ができた。恐ろしい能力をみてしまった感じがする。とても70歳の老人の作業とは思えない。スピードと正確さを兼ね備えて作業を進めてゆく。こんな棟梁の仕事ぶりをそばで見ていると「先生もやってみたいのか?」と聞く。「やりたい」と答えると、「やってみろ」と言ってくれる。「ダメ・ダメ、こうするんや」こんな会話をしながら、かんなの使い方、鋸の使い方、電気鋸の使い方、金尺(かなじゃく又はかねじゃく)の使い方、墨の入れ方、インパクトドライバーの使い方、ノミの使い方など、あらゆる大工道具の使い方をやさしく伝授してくれる。次第に、簡単な大工仕事を任せ

てくれるようになった。

こうなると私の悪い癖が出てき始める。自分の大工道具がほしいのである。ノミや鋸、電気かんななどを買いたいと言うと、「やめときなさい」とやんわりといなされる。それでもホームセンターでは Hitachi 製のインパクトドライバーが2万円で売っていたので買うつもりだと言うと、棟梁は真剣なまなざしで、「本当に買うのか」と聞く。どうしても自分の道具がほしいというと、「わかった。買うならホームセンターはやめとけ。まずパワーが足りないし、すぐに壊れる。あんなものは絶対に買うべきでない。本当にほしいなら、行きつけの店で私が買ってきてやる。」とやっと言ってくれたのだ。買ってきてくれたインパクトドライバーは5万円のプロ仕様(写真3-1, 2)だった。こんな具合に、電



写真3-1 プロ仕様のインパクトドライバー



写真3-2 各種サイズのねじくぎ



写真4 電気かんなとかんな削り台



写真5 電動丸鋸と小さい作業台



写真6 棟梁が譲ってくれた細鋸、ノミ、かな、金尺

気かな(写真4)、電動丸鋸(写真5)など大工道具の中で電動工具と言えるものが次第にそろっていった。かな掛けに必要なかな作業台も作ってくれた。ノミや金尺、墨ツボ、カネ切はさみ、屋根で使う波板用の波板切はさみ、木槌などは、棟梁の弟子が昔使っていたものだと言いながら次々にプロ仕様の大工道具(写真6)を譲ってくれた。リフォームが終わったときには、ほぼ大工道具はそろっていたし、その使い方も習得した。

◆水・電気・ガス工事と内装・卒業試験

水回りや電気・ガス工事は近隣の工事業者にやらせた方が、後々のメンテナンスに重要だという理由で、トイレと風呂・台所は、複数の水回り業者に連絡してくれた。やってきた業者

は必ず棟梁のテストを受けさせられるのである。「にいちやん、その床にセメントを塗ってみな」とか「その切れ端のパイプを繋いでみな」とか言うのである。やってきた業者は最初はびっくりするが、迫力に負けて言われるままに棟梁の指示に従うのである。出来栄をみて棟梁は「わるいけど、にいちやんのところには任せられんわ」と平然と言うのである。こう言われた職人も抵抗はしない。すごすごと「また良い仕事があったらお願いします」といって帰って行くのである。職人の技を知りつくしているらしい。職人を仕切れる職人の親方が本当の棟梁なのである。「にいちやん、ちゃんとできるような」と言われた職人の顔は誇らしい。そこにすかさず「施主は毎日使う訳はないから、風呂も、トイレも一番安いものでええんよ」「それからついでだから、そこらに並べてある瓦を畑の隅に砕いて埋めてくれ」という。棟梁の迫力は素晴らしい。職人は棟梁を尊敬しているらしく、余分仕事も文句も言わずにやってくれた。ガス工事業者にはLPガスボンベの据え付け、配管工事をしてもらったが、彼らも他の職種と同じ運命をたどったことは言うまでもない。なんとトイレとユニットバス、これらから出る排水を処理する合併処理槽、すべて合わせて200万円以内でできたのである。

こんな作業を続けること4ヵ月。2月に始めたリフォーム作業が完了したのは5月の終わりだった。平屋の離れ家と2階建ての納屋を倒し、その材料で平屋の小さい小屋を作り、さらに7部屋あった母屋の床と天井をすべて改修し終えたのだ。最後は内装仕上げだ。最初からの私の希望だった、掘り炬燵を棟梁が作り始めた。離れの家の大きな梁を炬燵の足に作り替え、最大8人が座れる大きな掘り炬燵(写真7)を作ってくれた。暖房には、古い電気こたつのヒーターを3機据え付けられるようにしてある。掘り炬燵を作っている間に、障子張、ふすま張、壁紙張(写真8)が私に言いつけられた仕事だ。障子を井戸端にもって行き、古い障子紙をたわしで洗い落とす。乾燥させてから、棧の補強をほどこ



写真7 解体した離れ屋の梁を足に使った掘り炬燵
奥に見えるステレオは私が学生時代に使っていたもの、レコードプレイヤーも再生させた。



写真8 私が貼った障子とふすま、床の間のクロス

し、次いでナイロンが織り込んである破れにくい障子紙を張り付ける。ふすまも表紙を剥がし、裏張りを補強してから表紙を張り替える。ふすまの裏張りには大正時代の新聞も貼ってあった。障子もふすまも、掘り炬燵を作りながら棟梁が、皺ができないような貼り方を口頭で指示してくれる。難しがっていると、炬燵づくりを中断して、やって見せてくれる。床の間のクロスも指示に従って張り替える。内装工事・建具職人仕事・クロス張、すべて棟梁が師匠である。かくして、内装も掘り炬燵も完成したのである。

棟梁の賃金は最初の約束通り、1日2万円で4ヵ月分=240万円、水回りが200万円、新規材料費が約20万円、しめて460万円の出費であ

る。後日何人かの友人に見せたところ、だれに見せても「1000万~1500万は最低でもかかったでしょう」と言われる度に、「もう少し安くできたよ」と言って自慢している。

私にとってのなによりの収穫は、リフォームの結果より棟梁の弟子になれたことだ。リフォームが完成して1月ほど経ったころ、棟梁が住み心地を見にきた。「家の調子はどうや?」「絶好調です」「今日は、家の調子を見るだけでなく、そろそろ先生の卒業試験をしに来た」と言うのだ。3日間無料サービス残業で、一緒に大工仕事をしてくれるというのだ。「何がしてほしい?」「そうですね。大工仕事をするための作業小屋(写真9-1,2)を納屋と屋敷の間に作りたい」と言うので、現場をじっと見て、直ちに「じゃ、今から材料を買ってくるわ」と言う。もう設計図も作業工程も頭の中できているらしい。敷石の上に4寸角の柱を1本立て、残り3ヵ所は納屋と母屋の柱を共用して、屋根の梁を組み上げる。その上にポリカーボネート製の波板を載せて固定する。柱と梁の木組みは、ちゃんと柱に切り込みを入れて組み上げる。平板は平面で使うと応力に弱いけれど、平面と直角に使うと応力に耐えるようになる。たとえ粗末な小屋づくりにも、釘で安易に木と木を繋ぐことはさせてくれない。電気丸のことノミだけを使っての木の接合技術を教えてくれたのだった。3日間の作業小屋づくりで、どれだけ私の腕が上がったかをテストされたようなものだ。ウッドデッキも作りたいと言うと、「もう自分で作れるはずだ。そんなことで私を呼ばなくてもいいだろう」「出来上がったら仕上げだけは見に来てやるよ」と言われて卒業試験は終わった。どうも最低ラインの合格がもらえたようだった。特に木組みの技術に魅せられたし、私には大きな自信となった3日間であった。

◆大工仕事の弟子

東京や大阪のサラリーマンに田舎屋リフォームの話をする目と目を輝やかせる。よほど田舎暮らしに憧れているのか、「おいでよ」と言うと言



写真9-1 卒業試験で作った作業場

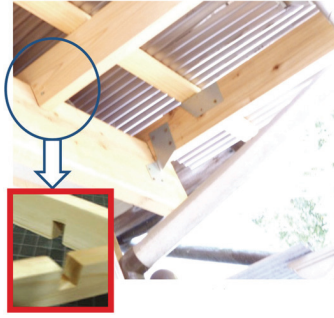


写真9-2 梁の木組み、屋根の波板張りなどさまざまな試験に合格

業着でズックを履いて、友人を連れて都会からはるばる新幹線に乗って手伝いに来てくれる。田舎屋のリフォームが終わって2年が経過するが、この間必要な場所に棚を作ったり、納屋に農機具収納棚を作ったり、ブドウ棚を作ったりなど、細かい大作業には事欠かない。彼らには今度は私が棟梁だ。

次の目標はピザ窯づくりだ。幸い、耐火煉瓦の町の病院にアルバイトに行っている関係で、耐火レンガ 600 個を手に入れて、土建屋の友人に4トントラックで運んでもらっている。これからベニヤ板と垂木で木型を作り、その木型に沿って耐火レンガを積み上げる計画だ。窯の4隅の垂直は糸に分銅をぶら下げることで垂直を取る。高さ合わせは、水道ホースに水を入れて4隅が同じ高さになるように水平を取る。水平器など使わなくても、垂直と水平はちゃんと棟梁の教えが生きるはずだ。レンガのつなぎは耐火セメントで、高さ 170cm の煙突もつけるつもりだ。今年中には高さ 120cm、幅 100cm、奥行き 150cm のピザ窯が出来上がるだろう。都会のサラリーマンは、今から喜々として手伝いたがっている。

ピザ窯が出来上がることを前提に薪割り作業



写真10 愛用のチェーンソー

も始めている。裏山には父が植林してくれていた30年もの檜もある。エンジン付きチェーンソー(写真10)で2本ほど間伐してあるし、敷地内の柿木やモミの木を伐り倒して(写真11)、これらを30cmごとに輪切りにしている。サラリーマン氏にこれを材料に斧で薪割りをさせたところ、腰が入っていなかったのか、はたまた柄が弱っていたのか、柄が折れてしまった。新しい檜の木の柄を買ってきたが、柄が太すぎて斧の穴に入らない。さっそく電気かんなの登場だ。ちょうど斧の穴に入る厚みになるように電気かんなで削ってゆく。ぴったりと柄が収まったと



写真11 チェーンソーで切り倒した
モミの木の太木

ここで、金属製のホゾを打ち込んで斧の刃をしっかりと固定する。すべて棟梁からの直伝の技術だ。大工仕事で教わった技術は、あらゆる場面で役に立つ。弟子たちは、そのたびに感心し、尊敬のまなざしで私を見てくれる。棟梁は今年で72歳になっているはずだ。「先生はさすがに頭が良いのか呑み込みが早い。もう弟子は取らないことにしていたが、先生は私の最後の弟子かもしれないね」と言ってくれた。昔の弟子が使っていたというプロ仕様の大工道具一式を私にくれたのは、私を弟子として認めてくれたからかも知れない。

◆おわりに

この話を終わるにあたり棟梁に心より感謝している。もちろん、友人に家の改修のためにだれか良い大工は居ないかと聞かれる度に、棟梁を推薦している。紹介した友人すべてから感謝の言葉ももらっている。ただし、家内は当然ながら、感謝の言葉もないし私のわがままに呆れているばかりだ。

読者の方にはさまざまな趣味をお持ちの方がおいでかと思えます。
編集室では本コラムへのご投稿を心よりお待ちしております。